

文献に記された明治から昭和の糸雛

資料調査編集員 飯伏 美朝

糸雛は鹿児島に伝わる三月節句の郷土玩具で、全国的にも珍しい、顔のない雛である。糸雛について、鹿児島市の郷土玩具収集家であった川邊正己(1906~1997)は、昭和10(1935)年発行の『髻髪歡賞』で、鹿児島ではカンピナ(紙雛)又はカンピナジョといい、どうしてカンピナが糸雛と呼ばれるようになったのか不明と記している。玩具関連文献をもとに明治中期から昭和初期にかけての糸雛の変遷を述べたい。

糸雛発祥の時期等に関する史料は確認できていないが、明治2~3年頃に鹿児島城下で行われていた年中行事を記録した『薩藩年中行事』に、3月の桃の節句に「紙雛」を飾ったとの記述があり、少なくとも明治初期には糸雛が飾られていたことがわかる。

郷土玩具研究家であった清水晴風(1851~1913)が明治から大正にかけて発行した『うなぬの友』には、6種の薩摩雛が掲載されているが、糸雛は以下の5種(図1)である。



図1『うなぬの友』掲載の糸雛

日本画家で、人形研究家でもあった西澤笛畝(1889~1965)は、大正4(1915)年に著した『雛百種』の立雛の部に、3種の薩摩雛の名称と製法を記載している。

古代薩摩雛...製法は立雛の女の様なもので、高砂の図を分割して一方に翁、もう一方に媪を描いたもの。

薩摩糸雛...製法は前者と同じで、模様は鶴亀や宝づくしなど色々ある。顔面の部分から長く糸を垂らしてこれが頭髪になっているが、男女の区別もついている。

近世薩摩立雛...ほとんど立雛と同じで、模様その他が粗雑になっている。

同書所載の図版には5種の糸雛があるが(図2)、前述の3種と名称が一致しないものがあり、古代薩摩雛の図にいたっては前述の製法と一致しない。



図2『雛百種』掲載の糸雛

『うなぬの友』と『雛百種』に掲載されている糸雛は、同じ糸雛の図版のようでも名称が一致しておらず、「雛」と「糸雛」の分類の基準も不明である。一方で、『薩藩年中行事』や川邊の記述をもとに考えると、鹿児島では少なくとも明治初期から昭和初期にかけての間、糸雛は一貫して「紙雛」と呼ばれていたと思われる。このことから、『うなぬの友』等の玩具関連文献に掲載の様々な糸雛は、糸雛に馴染みのない県外の玩具愛好家・収集家によって分類され、呼称された曖昧なものであったと推察される。

また、童画家であり、玩具についての著作も残した武井武雄(1894~1983)が昭和5年に著した『日本郷土玩具』の「鹿児島島の糸雛」についての記述をまとめると次のようになる。

- ① 変わり雛に当たり、現在残っているものは鹿児島のみ。
- ② 襟だけを写実を表し、顔を略して衣裳から麻糸等の髪を生やしたもの。
- ③ 見どころは前に垂れた絵で、男と女に对称となるものを、男は男雛に、女は女雛に描いて二幅対とする。
- ④ 並製は蕪雄な木版で、触ると手に付くような泥絵具を用い、衣裳はツヤ色紙。上製特上になると、巧緻な木版で、決して新聞で裏打ちなどしておらず、衣裳も金襴となる。

『雛百種』に記された古代薩摩雛の特徴は、『日本郷土玩具』での③の部分と、近世薩摩立雛の特徴は④の並製の部分と類似性があり、②については双方の糸雛全てに共通している。このことから、明治中期から大正初期にはいくつかに分類されていた糸雛は、『日本郷土玩具』が著された昭和初期ごろにはまとめて「糸雛」と呼ばれるようになっていたと推察される。

川邊は前述の『髻髪歡賞』の中で、『雛百種』や『うなぬの友』所載の糸雛に描かれた、高砂や藤、鶴亀の模様は残っておらず、地元の玩具店は、客から文献所載の模様を指定されることに困っていたとも記している。糸雛の見どころであった絵も、徐々にその種類が失われていったのである。その後、昭和19年発行の『綱車』には、満州事変から太平洋戦争へと進むにつれ、糸雛の製作者がいなくなり、民玩(郷土玩具)そのものも姿を消してしまった鹿児島の様子が川邊によって記されている。

戦後、作り手がほとんどいなくなっていたという糸雛は、戦中に夫の友人から作り方を教わったという鹿児島市の小澤壽美子氏により復元され、昭和63年には県の伝統的工芸品に指定された。長く薩摩の人々に愛されてきた糸雛が、再び消えてしまうことのないよう、後世に守り伝えていきたい。

〈参考文献〉

清水晴風 『うなぬの友初編、貳編、四編』 芸州堂 1891~1913
 西澤笛畝 『雛百種』 芸州堂 1915
 武井武雄 『日本郷土玩具 西の部』 地平社書房 1930
 川邊正己 『鹿児島島の糸雛』(板倉良『玩具観賞雑誌髻髪歡賞 その六』1935)
 伊地知峻 『薩藩年中行事』 鹿児島市教育会編 1937
 川邊正己 『鹿児島雛祭』(有坂與太郎他『綱車 74~78』新龍社 1944)
 齋藤良輔 『新装普及版 郷土玩具辞典』 東京堂出版 1997

黎明館的

コロナに負けない!

展覧会づくり

令和2年9月30日から11月3日まで開催された企画特別展「鹿児島島の城館」。展覧会がどのようにつくられていったのか、その過程をご紹介します。



特別展担当者の声

展覧会開催にいたるまで

企画資料係長 上村 俊洋

展覧会で館外所蔵資料を借用する際は、資料が借用・運搬・展示に耐えるか、運搬方法・展示方法や運搬時・展示時の大きさを確認するため、事前に所蔵元に出向いて検討する資料調査を行います。令和2年は、3~5月にかけて新型コロナウイルス感染症流行に係る緊急事態宣言下で、この資料調査が行えず、最終的な確認が7月までかかりました。

例年では5~8月に進める展示に関する事前準備(借用手続、展示に関する各種契約手続、図録・展示パネル原稿作成など)の実務が8月の1ヶ月間に集中する状況となりました。感染拡大次第では資料貸出中止の可能性がある所蔵館もあるほか、実際の資料借用の際は、感染状況の拡大による県外移動者の2週間待機のような不測の事態に備えて、展示担当者以外で県外借用に動くなど、例年とは異なる注意が必要な、綱渡りの開催でした。各所蔵者のご理解をいただき資料が当館に到着し、会期を無事に終えられたことは、大変ありがたいことでした。



開幕!

無事に作業を終え、いよいよ開幕の日を迎えました。当日はコロナ対策を実施しながら、開場式も行いました。

資料借用

県内をはじめ、全国各地から借用した資料を、美術品運搬専用のトラック(美専車)で黎明館まで運びます。今回の展覧会では、遠いところでは東京や福井から、陸路で資料を運びました。



無事、到着です。

会場設営

何も無い状態の展示室に、使用するケース運び入れたり、運び込んだケースを掃除したり、照明の調整をしたりと、展示作業に入る準備を行います。



ハイケースの移動は重労働... 4人がかりで運びます。

展示作業

資料を展示します。資料の取り扱いはもちろんのこと、展示する位置や角度など、様々なことに気を配りながらの作業です。同時に、キャプションやパネル、調湿剤、場内案内なども設置します。



展示の位置決め... 真剣です。

Voice 学芸課職員の声

企画特別展は、様々な博物館等から現物資料や写真等を借用して展示します。相手先への申請書類の作成や、資料の借用・返却日程の調整等を担当しました。借用・返却行程は、できるだけ筆書きになるように行程を組みます。今回はほとんどの借用先が当初の日程で了解してくださり、スムーズな行程が組めました。この他、企画特別展は報道機関と実行委員会を組織するため、広報のポスター案も委員会の各社と相談しながら決定しました。

学芸調査係長 新福 大健



隅々まで、綺麗に掃除します。

会場設営では、一から展示場を形作っていきます。可動式の壁を移動したり、展示に使用するケース運び入れたり、ケースの清掃をしたり、人手を要する作業が多いので、役割分担をしながら、学芸課総出で行いました。

主に清掃作業を担当し、ケースのガラス部分や、内部の床、壁などをきれいにしました。ガラス面は特に念入りに拭き取りを行いました。今年はマスクをしていたせいもあり、汗だくになりながらの作業でしたが、滞りなく終わることができました。

資料調査編集員 田平 晶子



最終日のシャッターが降りても、撤収作業と、資料返却という大事な業務が待っています。展示ケースから資料を取り出し、借用時に記録したメモと見比べながら、新たな損傷等がないかを確認します。それから、借用時と同様、慎重かつ丁寧に梱包し、再び美専車に載せ、返却の旅へと出発します。今回の返却ルートの一つは、鹿児島から山口、和歌山、福井、そして東京へと、約1,800kmに及ぶ3泊4日の日程でした。各資料館・博物館に到着すると、先方の学芸員さんと一緒に、再び資料と記録メモとを見比べるのですが、この瞬間が一番緊張します。そして異常が無いことを確認してもらい、ようやく返却手続きが終了するのですが、この時が、長く続いた緊張から解放され、ホッと一息つける瞬間なのです。

学芸専門員 吉村 晃一